「いのち」について③

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

道連れ

子どもが“おとなの都合で”いのちを失うという痛ましさは、前回取り上げた「神奈川県厚木市下荻野のアパートで、子供とみられる白骨遺体があるのを厚木署員が発見したというニュース」ばかりではありません。人の子は、小さい時独りでは生きていけないように生まれてきています。

１年前の５月には「大阪母子死亡」というニュースがありました。残されていた「最後におなかいっぱい食べさせられなくて、ごめんね」というメモに“何でこんなことになってしまったんだろう”という思いになった人はたくさんいたのではないかと思います。

母（28歳）はDVの被害を受け、それから逃れるために夫と別居、子（３歳）とともに発見されたマンションに移り住んだとされています。居場所を知られるのを恐れ、住民登録はせず、実家にも住所を知らせていなかったと報じられました（いずれも『朝日新聞』より）。

この世に生を享け、生きていこうとしている“いのち”に軽重があるとは思えません。現実にあまりに理不尽だと思える死や生き難い環境で生きて行こうとしている生に出会うと、それがニュースで報じられた“誰か”のことであったとしても、なぜ、こんなことが起こるのかという思いに苛まれます。人はいずれ死ぬ存在であるにしても、そこに“平等な死”はないのではないのかと。

しかしながら同時に人が孤立しないような、人や行政のかかわりがあれば、生きる手だてが講じられたのかもしれないとも思うのです。人は人が信じられなくなったり、誰にも言えない、頼れないという思いに囚われてしまうと、生きていく力が失われていく存在であるように思われます。

生の根源性

『宗教の授業』（法蔵館、2005年）の中で、大峯顯氏は「宗教はわれわれの生命そのものの根本要求」「宗教だけは、人間の内部にあって人間を超えている生命それ自身の衝動から生まれる」（198頁）と述べています。そして、

> 宗教とは、人間を通して、生命が生命自身を自覚しようとするいとなみに他ならない」とし、「われわれの生がもともと死へと向かっている生である以上、われわれは、この世に生きるための諸条件を充足するだけではとうてい満足できない。生きるための条件ではなく、生きることそのことを無条件に願わざるをえない。（中略）個人を超えた大きな生命そのものの願望なのである。（199頁）

と続けます。人間には生への無条件的な欲求があり、それはエックハルトによれば「生命は神から直接人間のうちに流れ入るから」（200頁）であり、その意味は生命がすべてのものより根源であるということ、生命の要求は人間のすべての要求の根源であるということ、そして、この根源的要求に応えるものが宗教であることと解説します。さらに、宗教とは「ただ生きること、生を根源的に生きること」（201頁）であると強調されます。

そうした生命の要求やただ生きることが全うされるために、人は人にはたらきかけることができます。人は人の中で生きていることを知っていくことができます。個人の生命が「個人を超えた大きな生命」あるいは「神」へとつながっていくはたらきがここにあるのだと思うからです。人は「私」自身が生きていくものではありますが、「私以外の人」から学び、その中でしか生きていないからです。

換言するなら、「個人を超えた大きな生命」あるいは「神」と個々のいのちの関係性への理解は、生命の根源的理解となっていきます。それは、現実の世界では人が人にかかわっていくこと、「縁」を結ぶことです。その中から生きていることの意味を感得していき、「生きている」ことそのものを体験していきます。それは「いのち」の力、「生きる力」、その根源に迫るものでもあります。だからこそ、その死はいのちの終わりそのものではなく、「個人を超えた大きな生命」あるいは「神」とも表象されているものへと普遍化されていくという理解が可能となってきます。

中山善衛三代真柱が出直されました（6月24日）

> 三代真柱 中山善衛様が、6月24日午後7時55分、出直された。満81歳。告別式は7月6日正午、北大路乗降場（臨時斎場）にて行われる。（2014年6月25日記）
>
> 三代真柱 中山善衛様の告別式が7月6日正午、天理市の北大路乗降場に設けられた臨時斎場で執り行われた。教会本部葬による告別式では、斎主の「告別詞」奏上に続いて、喪主である中山善司真柱様が玉串を奉献された。この日、臨時斎場には弔問者が引きも切らず訪れ、三代真柱様の遺徳を偲び、別れを惜しんだ。（2014年7月7日記）

天理教のHPはこう掲載しました。26日の本部月次祭の祭文では、「三代真柱の突然の出直というふしをお見せいただきました。わたくしどもはこのことに憂い悲しむばかりではなく、たすけ一条の道を勇躍お通りくだされた三代真柱のご遺志を心に、さらに年祭活動に一致して進むことが、霊にお喜びいただく道であると信じ、年祭への動きを止めることなく勇んでつとめさせていただく」（『天理時報』2014年7月6日）と奏上されました。そして、上田嘉太郎天理教表統領は告別式の弔辞の中で、年祭活動（2015年1月に勤められる教祖130年祭に向けての活動）のちょうど折り返しともいうべき時期での出直に言及しました。ちょうど“三年千日”※の真ん中での突然のお出直しでした。（※ここでは教祖130年祭に先立つ3年間。「おさしづ」に「口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た、なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや、千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。何程急いたとて急いだとていかせんで。ひながたの道より道無いで（明治22・11・7刻限）」「三年千日の辛抱、三年辛抱の道通れば、誰に遠慮気兼は無い（明治27・11・17）」とあり、3年の間しっかりと教祖ひながたを実践するように促される。）